

編集後記

編集長(ダン シロウ)

第30号をお届けします。新たにお三方の連載が開始されます。お一人は司法領域からの執筆。他領域に比べハードルが高いのか、今まで拳手がなかった分野からです。三浦さんは所属職場の上司の了解を得ての執筆だそうです。

二人目は、学校における自殺予防教育と対策の可能性の観点からの報告。この中にある「自殺予防教育を道徳的問題にさせないために」というフレーズには、オツと思わされる場所がありました。

三人目は、コミュニティ通訳とは対人援助通訳であるという認識からの執筆です。言葉は文言だけが翻訳されても、コミュニケーションの支えにはなりません。そこには背景文化や歴史への理解、共感が不可欠でしょう。

相変わらず私達の世界は、課題の尽きることのない現実です。でも、そこにこんな雑誌の形で一步を刻み続けることを、改めて成果と呼ぼうと思います。

最近、やたら勇ましいことを言う輩が、歴史を逆行させるような流れを作ろうとしています。対人援助の同志達とは真逆の、過去の歴史にも登場した浅はかな破壊者達。そんな者の言いぐさに飲み込まれたりせず、今こそ、ディテールを大切にしたい対人援助学の構築が強調されなければと思います。

編集員(チバ アキオ)

陶芸家、家具職人、カフェを経営する方と話す機会があった。現在の人の動きについて話して下さって非常に興味深かった。インターネットのホームページは現在、名刺程度の情報にして、そこにあるfbページ、インスタのアドレスをクリックしてもらうように位置付けているところが増えたそう。本日開店中とか鮮度が大切な情報は SNS で行う方が更新、双方向コミュニケーションがしやすい。そして、そこには写真を効果的に使うこと。とにかく光量が豊かで、センスのある、斬新な写真をあげることが大事という。現実、東京でイベントをやると来場者の 8 割がインスタ経由ときく。インスタは当然インターネットで世界とつながっている。ロンドンからの注文、シンガポールからの注文も入ってくる。ハッシュタグも有効に使う。多くの人が使うハッシュタグでは投稿が多すぎて埋没して、自分のアカウントにはたどり着かない。オリジナリティのあるハッシュタグを

作っていくことも大切で、それを他者が真似をし始めると同じ傾向の指向を持つものがつながり始める。そこから、その人とつながっている人にもつながっていく…。

そんな話のなか、私が勤めるところのホームページを見てもらった。最近の人とはとにかくスマホで見る。現実の児童虐待の事例でも子どもを預けたい時に、親は福祉や保健の行政窓口で相談に行くのではなく、スマホで検索が当然ときく。そのことでの事件も起こっている。そして、実際に自分のスマホを出してその研修会場でそれぞれが検索を体験する福祉職員への研修も行われている。当事者体験である。そのぐらい「スマホ」だ。よって、ホームページのスマホ対応は当然。その時にもスクロールの途中には余白で目を休めることが大切で、フォントも大小のアクセントを適宜用いて、余白も併せて有効に使う、文字ばかりではなく雑誌のページをレイアウトするように組んでいくことが重要ときく。写真も、対人援助の現場で、支援場面の写真が難しい事情があっても、職員がモデルになってもいいし、真上や下からのアングルで、しかも遠景、真上からのショットに斜めの構図を取り込んで…など本当に奥が深い。実際、対人援助の世界でも、そのセンスやオサレ感が際立っているところがある。それで援助をするわけではないので本質でないことは重々承知。ただ、サービスが飽和し、選択される状況となっている現実は否定できない。これから、その選択をするのは学生時代からスマホを使い倒してきた世代。とにかく写真を撮る、どんな時もおしゃれな時間を過ごしていることを発信する。その世代が福祉サービス利用者になっていく。実際、写真映えを意識して、その場の内装、建物、グッズのデザインを洗練させているところは多い。こんな動きがしばらくのスタンダードになるのではないかと話していた。

対人援助の実践現場ではこのあたりの動きは、じわじわと感じている。何をフックにするか。そのフックが付加価値で、顧客が選ぶということだけは確実のようである。しかし、多くの人に選ばれる結果だけに価値があるのではない。この時代、この世の中にこういう価値観で居続ける、存在し続けることも意義があることは、システム論を持ち出さなくても明らかである。すべては相互作用、ストロークがない瞬間はない。それがわかれば、おのずとやることは見えてくる。

編集員(オオタニ タカシ)

30 号目の発行です。季刊ですから、創刊から 7 年半経ったことになります。私自身は 10 号からの途中乗車なので 5 年を過ぎどころですが、書き始めたころが遠い昔のように感じます。30 号の編集会議では、今号の具体的な編集スケジュールや

分担の確認、次に向けてのアイデアなど、さまざまな話題があったのですが、個人的に最も頭に残ったテーマは「目標の立て方」という話題でした。

対人支援の現場でも「計画」が重視される時代になりました。Plan(計画)-Do(実行)-See(評価・見直し)という考え方は、「このくらいいいでしょう」という支援のあり方を問い直すという点では意義があったと思いますが、その「計画」も心ばかりの「主体性」と「実現可能性」でしか語られない弱さがあります。理屈や損得でなく、自分のために何を選びとっていくのか。そのことの積み重ねが、そのまま「生きる」ことにつながっていくように感じます。51名の執筆者陣の、そんな生き様も垣間見て頂ければと思います。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻30号

第8巻 第二号

2017年09月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第31号は2017年12月15日

発刊の予定です。

原稿締切2017年11月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数(ずっと・・・というのもあります。多くの方達が連載8年目を迎えています)を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない、対人援助領域からの積極的参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

この女性は、木陰の物語「宿題」に登場する。娘が帰省して、家族のために作った弁当を受け取って、「今日は嵐か？」と口にする母だ。

「珍しいことやな、雪が降るわ！」などとよく言う。こういう軽口の応酬を私は好きだが、昨今の良いことばかり言い合っていたい時代の気分は、すぐ傷ついたり、落胆したりする。どうしてみんな、寄ってたかって「カワイイ！」と言い合っていないと不安になるような世の中になったのか。

そう口にしていても、何もかもが良いわけではないことは皆知っている。だから嘘くさいポジティブは時代のお囃子なのだ。

そんなコミュニケーションをまだ続けるのか？それが本当に良いことだと思えているのか？いや、そうしていないと、他者との関係が不安で仕方がない元超大国のようなメンタリティに、我が国もなってしまったと言うことか。

(2017/9/1)